SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

1817年12月8日(旧暦文化14年11月1日)静岡市広野に落下した隕石を捜して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-05-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 寺田, 昭
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025115

1817年12月8日(旧暦 文化14年11月1日) 静岡市広野に落下した隕石を捜して

寺田　昭*

1．はじめに

私は趣味で鉱物・隕石標本を収集しています。県立中央図書館で郷土資料の本である「駿国雑志」を見ていたとき、「磐石」という県内各地で採れる色々な石の解説をしてある所が目にとまりました。そして、その中の「龍石」という記事に、静岡市広野（静岡市の南西部にある海に面した町）に隕石が落下したと思われる内容が載っていましたので、調べてみました。

2．「駿国雑志」（すんこくざっし）とは？

これは阿部正信（あべまさのぶ）が江戸時代の天保14年（1843年）に著した地誌で、駿河国（現在の静岡県）の雑多な事を記してあります。著者の阿部正信は旗本で文化14年（1817年）の9月に駿府城の警備役（駿府加番）として駿府に着任しました。それから1年の在任期間に公務の余暇を利用し、駿河国を調査して資料を集め、編纂を始めました。江戸へ帰ってからもそれを続け、完成までに25年の歳月を要しました。その量は全49巻にも及び、当時の地誌としては空前の大作とのことです。「駿国雑志」の写本は、国立公文書館内閣文庫や静嘉堂、静岡県立中央図書館にあります。

この「駿国雑志」の第二十八之巻の「磐石」の中の「龍石」は以下の文章となります。なお、この「龍石」の記載は、吉見書店発行の「駿国雑志」全四巻（復刻本）の中の「駿国雑志・二」のP 498～P 499に載っています。

「龍石」

有渡郡廣野村、百姓卯兵衛の許にあり。是文化十四年十一月朔日、天氣晴明、午の尅計り、夥き響して、西南の庭上に落る物あり。卯兵衛奇とし、是を拾ふに一小石也。其熱事火の如し。正信四足の御小屋に、卯兵衛を呼て是を見る。石の形ち鷄卵の如く、長高共に一寸五分計り、其色白く、裏に至て青色を帯せり。其肌艶ありて温也。其目方廿一匁八分也。地頭松平能登守乗保、代官遠山丹右衛門某、巡見の時、此奇事を聞、領主に訴ふ。云云。御城代松平伊豫守定能云。是龍石也。龍常に圓石を掌に握りて戯る時、誤て落す事あり。是を得る者、最も幸あり。故に福石共云へり。云云。卯兵衛は是を尊て金比羅と崇む。後領主、此石をめし取て、辨天に祭る。按るに、其齋祭する所、各違へるは、其信敬する神佛に據なるべし。

＊　静岡市安倍口団地5－41－8（TEL・FAX　054－296－5937）

3．現代語訳と解説

「龍石」

有渡郡廣野村（現在の静岡市広野）の百姓卯兵衛（正確には宇平・・・補足参照）が所持しています。文化14年11月1日（新暦1817年12月8日）天気快晴の午の刻（午前11時～午後1時）の頃におびただしき轟音を響かせて（大音響を発して）、南西の庭の上に落ちた物がありました。卯兵衛（宇平）は何だろうと驚き、それを拾ったところ、一つの小石でした。それは火のように熱かった。

阿部正信はその話を聞き、四足門（よつあしもん＝現在の静岡市中町にあった）の所の建物に卯兵衛（宇平）を呼び、それを見ました。石はニワトリの卵のような形をしていて、幅と高さは一寸五分（約4.6 cm）くらいでした。色は白く、裏側は青色を帯びていました。表面は艶があり、温かみを感じました。重さは廿一匁八分（約82 g）。

領主（地頭）の松平能登守乗保（文化7年から江戸城西丸の老中でもありました）の部下である代官遠山丹右衛門は巡見の時に、この珍しい出来事を聞き領主である松平能登守乗保に知らせました。（当時の廣野村は岐阜県恵那郡岩村町の岩村藩の飛び領地でした。岩村藩の飛び領地は、県内に現在の地名で静岡市（広野・鎌田・石部）藤枝市（横内・前島・堀ノ内・助宗）焼津市（下当間・吉津）岡部町（宮島・落合・村良）島田市（大草）清水市（北脇・北脇新田）がありました。）

また、当時の駿府の御城代（駿府と大阪の2カ所に置かれ、江戸から駿府支配のため派遣された最高位の旗本）の松平伊豫守定能（さだまさ）が言うには、「これは龍石という物で、龍は常に丸い石を手に握っていますが、間違って落とす事があります。これを手に入れた人は最も幸せになれるので、福石（幸運の石）とも言えます。」卯兵衛（宇平）は、これを尊い金比羅とあがめました。後に岩村藩の領主である松平能登守乗保は、この石を手に入れ、弁天に祭りました。

それぞれ祭る所が違うのは、よりどころとなる神仏の違いのためでしょう。

4．補足

百姓卯兵衛（宇平）は、静岡市の郷土史研究家である増井春男氏が、静岡市の広野の大徳寺の先代住職様と共に過去帳を調べた結果、「卯兵衛」でなく「宇平」とあったため両方の名前を書いてあります。岩村町の古文書である「岩村概略記」にもこの事件は記されており、百姓の名は「宇兵衛」と記されています。なお、苗字は江戸時代で百姓のためありません。

阿部正信は駿府へ赴任して、わずか3ヶ月後にこの隕石を見ていますし、その職務は警備役と言うこともあり、おそらく正確な内容だと思います。

隕石は大気圏へ突入すると、大気との摩擦により大変な熱を生じ、表面に黒い焼け焦げた皮（フュージョンクラスト）を作りますが、それについては触れられていません。

また、この記述の中で石の色を「青色」と書かれていますが、日本では緑色を「青色」と表現する

こともあります。隕石の中には白い隕石や暗緑色でなめらかな触感のあるタタフィン隕石（1931年チュニジアに落下）という隕石もあります。この記載から、このような隕石の一種かも知れません。

なお、原文中の5行目の「地頭・・・、代官・・・、・・・領主に訴ふ。」は直訳すると「地頭と代官が領主に知らせました。」となりますが、地頭＝領主ですので「代官が領主（地頭）に知らせました。」としました。

5．岩村町の古文書「岩邑（むら）概略記」

次に、岐阜県恵那郡岩村町の旧家、山上家に保存されている江戸時代の古文書「岩邑（むら）概略記」の中の「弁財天」の記事にも、この事件が記録されていたので、紹介します。

弁財天

文化十四丁丑年十二月朔日　駿州志太郡広野村宇兵衛なる者の苣庭へ　天地鳴動して　一つの玉落つる　取りて見るに熱し　袂に乗セて運ひ　此のよし御陣屋に達しけるに　江戸へ遣し候　占セ給ふに　弁財天の玉なりと云う

候　弁財天を御信仰なれハ　文政三辰年　開眼なりて当所御城内に祭り・・・

（以下略）

6．現代語訳と解説

弁財天

文化14年12月1日（新暦1818年1月7日）駿州（静岡県）有渡郡（志太郡は誤り。陣屋が飛び領地である志太郡横内にあったための間違いと思われます）の広野村の宇兵衛という者の苣庭（何かを植えた庭だと思います）へ、天地鳴動させて一つの玉が落ちました。手に取って見ると熱かった。（着ている物の）たもとに乗せて運び、現在の藤枝市横内にあった御陣屋（代官所）に届けた所、江戸屋敷へ送られました。（領主である松平能登守乗保が、老中役で江戸城西丸にいたため）占って頂いたところ「弁財天の玉」という事でした。乗保公は弁財天を信仰していたので、文政3年（1820年）にこれを岐阜県恵那郡岩村町の岩村城内（日本三大山城の一つ）に祭り・・・

（以下略）

7．「駿国雑志」と「岩邑（むら）概略記」の違い

		駿国雑志	岩邑概略記
落下年月日	旧暦	文化 14 年 11 月 1 日	文化 14 年 12 月 1 日
	新暦	1817 年 12 月 8 日	1818 年 1 月 7 日
百姓の名		卯兵衛または宇平	宇兵衛
大きさ		約 4.6 cm	記載なし
重さ		約 82 g	同上

8．まとめ

この 2 つの記録にあるように、隕石落下の事件が駿府城代や岩村藩領主（兼江戸城西丸老中）に報告されたことからも、当時かなりの話題になったことと思います。

その後、広野に落下したこの隕石は、岩村城二の丸に祭られた後、明治維新の岩村城取り壊しの際、岩村町大路（だいろ）の八幡神社に預けられ、神宝として本殿に保管されておりました。そして、その「伝えられている隕石」は現在岐阜県恵那郡岩村町の歴史資料館に展示されており、誰でも見られるとのことです。この「伝えられている隕石」は、平成元年（1989）に中日新聞にも掲載され、それによると大きさは直径約 16 cm の球形に近く、重さは約 7.5 kg で花崗岩に似ているとのことです(写真参照)。しかし、「駿国雑志」では約 4.6 cm で、卵形をしており、重さは約 82 g と歴史資料館の物と違います。私の見解としてこの違いは、何らかの理由で途中ですり替わったためだと思います。したがって、もとの隕石がどこかに存在しているのではないでしょうか。

以上、宇宙からのお客様　隕石にロマンを感じ、静岡市にも隕石が落下したと思われる資料の解説をしてみました。

もしかしたら、その時同時に落ちた隕石があったかもしれません。広野、またはその近くの旧家の皆様で、このような言われのある石をお持ちの方は御一報下さい。

最後にこの文章を作るにあたり、静岡県立中央図書館調査課の皆様と郷土史研究家の増井春男様に、大変お世話になりました事を深謝致します。また、岩村町まちづくり実行委員会様には、地元資料をお送りいただき有り難うございました。

中日新聞
1989年（平成元年）6月1日（木曜日）　東濃

170年前のインゴ？

古文書にも記録

17日の還御祭　ご神宝として公開

岩村の弁財天社の丸い石

恵那郡岩村町に長く保存されていた球形の石が、イン石ではないか？と地元で話題になっている。一見みかけ石風だが、地元旧家に伝わる古文書にはイン石と推理させる記録があって「ひょっとすると」と大騒ぎ。同町は十七日に計画している岩村城弁財天社・還御祭」（同町氏子総代会、町まちづくり実行委員会共催）に「神宝として公開することにしているが、祭りの〝大目玉〟になりそう。

イン石騒ぎのきっかけは、今回の還御祭計画。同町のふるさと創生事業の一つとして、明治四年に廃仏毀（き）釈で廃社となった弁財天社を復活させようということになった。弁財天社のご神体は当時、江の島弁天へ返宮されているので、今回ご神体を分霊してもらい新たに祠を建てる。

ところがこの事業に伴って岩村町神社史を調べたら、神宝什（じゅう）物の部類に「花こう岩石一個、五寸二分、弁財天のご神体か」と記されていた。廃社の際にこの石は地元の八幡神社へ預けられた形となったことも分かった。同神社を探したところ社殿に保存されていた。

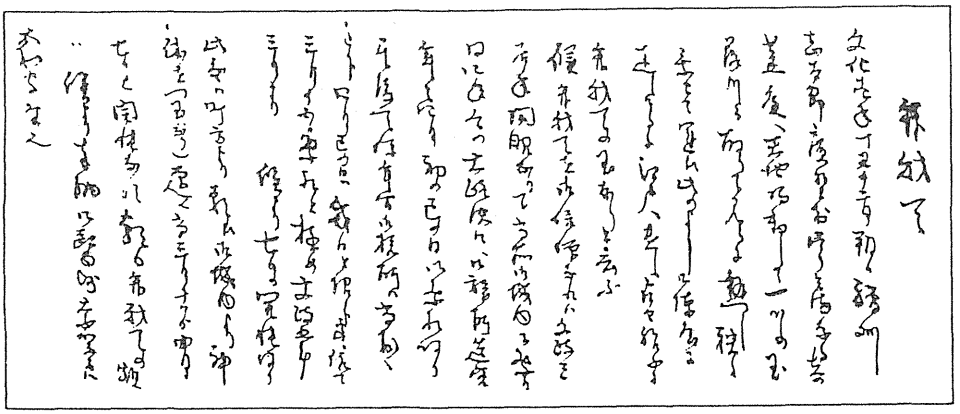
一方、地元の山上家に保存されている江戸時代の古文書「岩邑概略記」には一文化十四年（一八一七年）十二月一日、岩村藩領の駿州広野村（現在の静岡市広野）の宇兵衛なる者の庭へ天地鳴動して一つの玉が落ちた。手に取ってみると弁財天の玉と分かり信仰の厚かった藩主が岩村城内にまつった」と記されていた。二つの記述から、関係者は百七十年前に静岡市に落ちたイン石が今日まで保存されてきたのではないか、という推理にいたった。

石は直径約十六ガで重さ約七・五ギ。灰色でみかげ石に似ている。イン石は普通表面が黒く焦げているが、まちづくり実行委員会は期待十分。「ご神体とするためイン石の表面をきれいに仕上げた可能性もある」とイン石説をとっており、大切に役場金庫に保管している。

イン石は見分けが難しいとされるが国立極地研究所（東京）隕（いん）石資料部の小島秀康助手は「写真を見た限り、積極的にイン石とする材料はない。しかし古文書がある以上詳しく分析しないと否定もできない」と話している。

還御祭には女優の渡辺美佐子さんも参列するが、江の島からのご神体と併せ石の渡御行列も行い、その後は町歴史資料館で公開し、みなさんにそれぞれ推理してもらう計画だ。

イン石ではないか、と話題を集める石の球＝岩村町役場で



1989年6月1日　中日新聞より